

熱と火——カント自然学覚書（1）

高橋 康造*

Wärme und Feuer —— Eine Untersuchung über die kantische Naturphilosophie (I)

Kozo TAKAHASHI

Abstract

Wie Kant über Chemie behandelte, ist so dunkel, dass wir die plötzliche Entstehung der chemischen mannigfaltigen Ansichten in seinem Nachlass 'Opus Posthumum' schwer begreifen können. Aber wir versuchen, die kantischen Meinungen über die chemischen mannigfaltigen Erscheinungen zu interpretieren, aufgrund der damaligen entwickelten, populären und naturphilosophischen Ansichten, besonders der Franzosen. In unseren nächsten Abhandlungen wollen wir von der Kantischen Theorien über 'Feuer' und 'Wärme' en détail behandeln.

Keywords: Chemie, Kant, französische Naturphilosophie

序

カントの化学に関する論文や「覚書」(Reflexionen)は公刊された著作全体からすればそれほど多くはなく、またその「覚書」での言及も他の分野に較べれば見劣りするものが事実である。しかし最後の著作としてカントが企図していた遺稿『オプス・ポストムム』(Opus Posthumum)¹で、その化学理論が突如として前面に出てきている。その経緯を繙くことは容易ではなく、またその全貌を俯瞰することも簡単なことではない。というのもカントは『オプス・ポストムム』以前においては、断片的にのみ化学事象について論究し、まとまりのある見解を述べることがなかったからである。カントが当時の化学理論をどのように見ていたか、あるいは自らの主張を述べるさいにどのような経験的事実を念頭に入れていたか、またどのような典拠をもとに自らの論を展開していたか——これらのことが必ずしも見えてこないのである。

なるほどこのような典拠をアカデミー版カント全集第14巻の校訂者であるアディッケスは数多く挙げているが、我々の見るところ、カントはそれらが入手可能であっても、また実際そのような典拠を蔵書と所持していたとしても、カントはそれを熟知し咀嚼して自説を展開したとは考えられない。のちに本稿でも見ることになるが、かの悪名高いフロギストン理論に対するカントの取り扱い一つをとってもこのことは明らかだからである。むしろカントが自らの主張の後ろ盾としていたのは、当時流布していた通説的な化学理論や通俗的・自然哲学的見解である、というのが我々の仮説的な見解である。

本稿(1)では当時の化学理論の趨勢をとくにフランスの自然哲学と見なすことのできる諸著作などにあたることによって跡付け、次の稿(2)では1755年に書かれた「火について」(De Igne)というカントの小論文と遺稿である「覚書」(Reflexionen)をもとにカントの「火物質論」を検討し、最後の稿(3)では『オプス・ポストムム』などに出てくる熱理論またはエーテル理論を取りあげることにする。また(2)、(3)では

平成12年10月13日受理

* 総合教育センター・助教授